

はじめに

本書は、ヨーロッパにおける国家間関係の展開に焦点を当てながら、国際政治の仕組みについて簡潔にまとめた入門書である。国際政治学に関わる《Ⅰ. 構造分析》、《Ⅱ. 歴史分析》さらに《Ⅲ. 情勢分析》を通じて、ヨーロッパを中心とした国際政治の展開について、総合的な基礎知識が獲得できるようにまとめられている。

国際政治の特徴を際立たせるためには、国際政治の起源であるウェストファリア体制、国際政治の古典的な法則としての勢力均衡、近現代を特徴づけた帝国主義や二度の世界大戦、冷戦の展開とヨーロッパ統合、民族紛争と冷戦後世界、あるいはグローバリゼーションとアメリカ政治外交など、複数の課題に取り組むことが求められている。

また国際政治の構造を把握するためには、ナチズムやスターリニズム（政治学的な視点）、ロシア革命や「ベルリンの壁」（歴史学的な視点）、民族紛争や移民問題（社会学的な視点）、さらには帝国主義やグローバリゼーション（経済学的な視点）など、国際政治全般に関わる多様な視点から検討を試みる事が重要である。

本書はこうした課題に対応することを目的として複数の地域（イギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、ロシア（ソ連）、さらにユーゴスラヴィアなど）を分析の対象としてまとめられている。

今日、国際政治の展開は混迷を深めている。2～3年後の展望を描くことはできて、20～30年後の展望を示すことはほぼ不可能である。

しかし、国際政治には独特の法則がある。それは国際政治に関わる構造や歴史を学ぶことによって到達しうる「感覚」でもある。本書の狙いも、国際政治学がこれまでに残してきた学問的成果を提示し、その分析を通じて独自の視座をまとめていくことにある。本書の各部分に示された国際政治学者の見解や、巻末の参考文献を通して、国際政治学に関わる視野をさらに広げていくことも可能となる。

人類は二度の世界大戦を経た後も軍備拡大競争を続け、冷戦の時代は核兵器の開発が際限なく進んだ。冷戦後世界では核兵器の拡散が進み、不安定な時代は依然として続いている。世界各国の「民主主義」を基礎としたシステムも、制度疲労の兆候を示しつつある。

他方で、戦争や紛争へと至る前に、対話と外交への期待が世界的に高まる傾向は、国際社会が、対立よりも協調の可能性に、依然として高い価値を認めている側面を示している。国際社会を覆う不安定な兆候のなかで、協調の模索を目指す対話と外交の役割を問い直すことが国際政治学の意義であり、課題である。

本書の執筆に際して、法律文化社のみなさまにたいへんお世話になった。とくに田磨純子社長から、多くのご助言を賜った。心からお礼を申し上げたい。

2017年9月5日

清水 聡